

2019 年度多摩美術大学校友会奨学金 選考評**小林 明日香** 大学院美術研究科 修士課程 絵画専攻 日本画 2年

水面がゆらぎ、街の雑踏の中作者の柔らかな眼が行き交う人に注がれる。決して派手な表現ではないが、永い時間をかけ人營を見つめている。制作において単なる思いつきではなく作品に心情を定着させる事は並大抵な事ではない。こつこつと積み上げ、「支柱」「ホーム」「橋を渡る」などの作品に仕上げた。「リピート」は大作の力作だ。

森田 舞 大学院美術研究科 修士課程 絵画専攻 日本画 2年

作者は在学する中で制作量が一番多く、大作も多い。巨大な壁画を描いてから疲れ果て、アルバイトを夜までこなす姿を見ていたので、奨学金が決まって良かったと思う。彼女はすぐ次の制作の一部として奨学金を使い描くだろう。いずれ作者が作家として、いろいろな人を感動させてくれる日が来る事を願っている。

宮林 妃奈子 美術学部 絵画学科 油画専攻 3年

絵には世界のとらえ方を転換する力があると宮林妃奈子は述べているが、それはまさにアートの本質であり、変わりゆく自分の環境の中から丹念に事象を見つめ、世界を発見していく過程が鑑賞者の心をとらえる。繊細な心を持ちながらその表現方法は勢いがあり、粗削りでありながら明るく心地よい。非常に積極性があり、ドイツへの交換留学を経験してまた新たな地平線に立ち、未知なる風景を私たちにを見せてほしい。

許 寧 大学院美術研究科 修士課程 絵画専攻 油画 2年

春の芽吹きや温かい雨、鳥のさえずりや鼓動の音。五感の身体的感動があることによって人間は生きていける。許は長い時間と努力をかけて今ある境地を見出したであろう。巨大な画面を覆う緻密な筆致に託した情熱と信念には大きく感情を揺さぶられるものがある。西洋の古典絵画や自然科学の研究にも多くの力を注ぎ、大きな画面がもたらす精神性と身体性を追求していく姿勢は今後の支援に値すると考える。

國持 友里 美術学部 絵画学科 版画専攻 4年

國持は人間が活動している際に生まれる非言語的な情報を可視化することに興味を持っている。ポートフォリオでは、彼女がこの3年間、その同一テーマに対してさまざまな角度から手法を変え、真摯にイメージの具現化に取り組んでい軌跡をみることができた。詳細に考えられた次回作は、これまでの研究を発展させたものとなり、さらに充実したものになるだろう。彼女の取り組みは今後のさまざまな可能性が感じられ興味深い。

小柳 春乃 大学院美術研究科 修士課程 彫刻専攻 1年

小柳さんは、社会における「癒し」や「優しさ」などをテーマに、学部より一貫して石を素材として制作してきました。堅牢で制約の多い素材に対して、シンプルな伝統的技法によって時間をかけながら生まれてくる手仕事の造形には、自ずと触覚的な柔らかさと、手の温もりが感じられる。古雅な仕事ではあるが現代が失いかけている手を通した思考性が感じられる。伝統性に埋没することなく同時代的な感覚を積極的に取り入れながら、今後も努力してほしい。

佐々木 優 大学院美術研究科 修士課程 彫刻専攻 2年

佐々木さんは、学部より一貫して現代社会における、とりわけ日本の核家族がもたらす女性の社会的な役割や位置付けを焦点に、自身の家庭環境や体験をもとにインスタレーションや映像作品を制作してきました。昨年度は交換留学生としてフィンランドに滞在中、自己のテーマを客観的に検証しながら制作した作品は強いメッセージ性と、透明感のある美しい映像との対比が印象的な作品でした。今後の創作活動に期待の持てる学生です。

下 虎之介 美術学部 工芸学科 金属 4年

下君の「金属における鏡面の表現」の形を「私自身の様々な面を自分なりのドローイングから形に起こし、私自身の持っている仮面について造形を行おうと思う。これは、私の持っている見えない仮面であり、その形は仮面ごとに異なる」と言っています。金属鏡面を伴う仮面の様子に興味をそそるテーマであると思います。これまでの研究活動もしっかりとしていて、今回の研究計画テーマに基づいて制作をして行けると思います。結果報告が楽しみです。

山崎 真梨恵 大学院美術研究科 修士課程 工芸専攻 2年

山崎さんの研究テーマは「成り立ちのルール 陶のユニットによる制作」で、「陶の小さなユニットを一つ一つ手でつくり、それをある規則に連ねることによって生まれるかたちを求めて『つなぎ方』を試行錯誤しながら研究」するとしています。このテーマで学部より一貫して制作して来た様子を資料より見て取れます。陶でつくるユニットの様々な形とそれをつなぎ合わせながら現れてくるであろう形に広がりを感じます。一層の熱意の制作に期待しています。

長谷川 裕子 美術学部 芸術学科 4年

「巫女」と「巫女的な役割」について考察し論ずることは、現実と超現実の交通について想いを馳せると言うことでもあり、その交通の結び目としての聖地を浮かび上がらせることでもある。また「巫女」が現代においていかなる存在として機能しているのか、あるいは機能しうるかという問題へのアプローチも日本の分散的な現代の社会構造を考える上で重要である。多層的な文化論への意識が、この論文を支えるということは、興味深い論文になることを示唆している。

松井 日向子 美術学部 生産デザイン学科 プロダクトデザイン専攻 4年

「見えないものを感じるには」が本研究のテーマである。目には見えないものへの興味から松井さんは、紙素材=トレーシングパーパーを、蒸気という外的な刺激で変化させる実験的な創作を繰り返した。素材の変化に対する美的感性や独創的な着眼点が評価出来る興味深い作品である。こうした制作を踏まえ「見えないものとひとの関わり方」をリサーチし、さらなる創作を行うという。今後の展開に大いに期待したい。

王 玉 大学院美術研究科 修士課程 デザイン専攻 プロダクトデザイン 2年

王玉さんの研究については、丹念なプレゼンテーション資料と、充実した先行研究の成果をまず評価したい。親と子というユーザ間での、愛情醸成と深化を実現するプロダクトデザインが研究テーマであるが、ここで注目すべきは、その実現手段としてCMFすなわち、色 (color)、素材 (material)、仕上げ (finish) を活用するという斬新なアプローチである。今後の展開と成果に大いに期待したい。

大村 晋二郎 大学院美術研究科 修士課程 デザイン専攻 テキスタイルデザイン 2年

大村くんは作品を制作する中で、「視線から生まれる衝動を表現するのではなく、視線から生まれた感情と向き合うことで自分を理解し、その自分を防御し解放する造形を目指す。」という。常日頃、彼は多くのニット・サンプルを試作する。しかし、彼の使用する透明な素材は軽そうで実は重い。初めから身に纏う服ではなく、飽くまでも自分を理解するためのコンセプトチャルな装置なのではないか。それが見る者を惹きつけ、着ることを強く想起させる。

薛 梦怡 大学院美術研究科 修士課程 デザイン専攻 環境デザイン 2年

薛さんは修士1年次では上海の古い集合住宅の保存再生の提案をしている。2年次は過疎化が進む瀬戸内海の男木島で、空き家や空き地を活用した離島の集落再生に取り組んでいる。どちらも既存の環境を十分リサーチし、そのよさを維持することを重視している。産業構造が変化し、かつての暮らしを復活することは不可能な中で、歴史的な景観を継承しながら、単なる保存とも再開発とも異なるゆるやかな手法で現代の需要に応える環境デザインを目指している点が高く評価できる。

胡 俊傑 大学院美術研究科 修士課程 デザイン専攻 統合デザイン 2年

テーマに対し、抽象的な概念を言語化しながら、具体性のあるモノや方法に落とし込もうとし、プレゼン効果についても計画的に検討が進められている。ロッカーを象徴的な存在として、現代社会や現代人に擬えているところは興味深い。扉を開けることで、鑑賞するといったインターフェースも斬新で、社会の闇を覗き見るといった感覚も共感できる。考え方やフォーマットは素晴らしい内容となっているので、今後、コンテンツについて更なるジャンプを期待したい。